こどもの日

かつおまつり

かつお一本釣り大会（一般女性の部）で新記録（12kg）誕生

重留礼佳さん（加世田常潤高１年）

こどもの日かつおまつりが５月４・５日、地場センターを中心に開催され、家族連れなど約４万５千人の人出でにぎわいました。

かつお一本釣り大会には、小学生から一般まで力自慢が続々と参加し、大きな声援を受けながらカツオに似たてた砂袋を吊り上げていました。中でも一般女性の部で新記録が誕生した瞬間、客席から歓声が上がり、大いに盛り上がりました。

このほか、恒例のかつお節削り大会やかつおパックつかみ取り大会など、子どもたちが参加した催しのほか、地元バンドのライブや踊りなど、様々な催しが行われました。

お父さんもがんばるかつお節削り大会

終日にぎわったかつおグルメロード

鮫島流星君・野村真之介君（加世田高校２年）による漫才。

■大人気！「かつおグルメロード」

昨年から始まった商工会議所青年部による「かつおグルメロード」が、地場センター前の歩行者天国に設置され、かつおラーメンやかつお丼、かつおカレーなどの出店が立ち並びました。また、「活き〆Ｂ１カツオ」を使った握りずしも販売され、食べた人たちから「カツオなのに匂いがない。おいしい」などといった声が聞かれました。

これらカツオを食材とした料理のほか、枕崎の黒豚を使った「鹿篭豚丼」などがずらりと並んだテントの前には、終日多くの人が訪れました。

■鹿児島水産高校生も大活躍

鹿児島水産高校の生徒たちによるカッター体験航海やヒラメの稚魚放流体験も行われました。

ヒラメの稚魚放流体験は「かつおまつりの日に海や魚、水産高校について学ぼう」と行われたもので、参加者たちはヒラメの生態などについて説明を受けた後、同高校の実習船「拓青」に乗り込み、枕崎港の堤防の外で稚魚を放流していました。

鹿児島市から訪れ、子どもと一緒に参加した新田弘已さんは「親子でとても楽しめました。連休のいい思い出になりました」と話していました。

すっかり人気者「お魚戦隊カツオジャー」

茶節・腹皮の振る舞いコーナー

鹿児島水産高校によるカッター体験航海とヒラメの稚魚放流体験

第23回 枕崎市少年の船

希望者約30人が塩手鼻の慰霊碑に参拝

洋上慰霊祭で献花する子どもたち

三島村営船「みしま」（1196㌧）で黒島へ

黒島流れの歴史が結ぶ交流

第23回枕崎市少年の船が５月22日に行われ、小・中学生や一般など約240人が参加し、黒島の方々と交流しました。

少年の船は、明治28年に起こった枕崎の海難史上最大の悲劇といわれる「黒島流れ」と、懸命に救出に当たられた黒島住民の温かさを語り継ごうと、昭和56年に始まりました。

近年は天候等の影響のため、４年ぶりの開催。黒島に上陸するのは５年ぶりとなります。

当日は、朝からあいにくの雨。出発間もない船上では、子どもたちが、普段見ることのない海から眺める立神岩に「岩の形が違う」と驚いていました。

洋上慰霊祭は、海難の犠牲者を慰霊する白衣観音が見守るユキノ瀬沖で行われました。原田祥之君（桜山中２年）が鎮魂のことばを述べ、参加者たちが黒島流れで亡くなられた方々の御霊に献花、一分間の黙とうを捧げました。

片泊ふれあいセンターで行われた対面式では、子どもたちを代表して、茅野亮平君（別府中１年）が「これからも黒島の皆さんと交流を深め、仲良く助け合っていきたい」とあいさつ。黒島の子どもたちが郷土芸能・面踊りで歓迎してくれました。

昼食の後、黒島の子どもたちが作った黒島流れの紙芝居が披露されました。黒島の住民たちが、流れ着いた船員たちを懸命に救出したことや、当時、非常食として蓄えられていた「養生米」を炊いてけが人を看病したことなど、当時の様子をわかりやすく表現していました。

また、子どもたちによるジャンベの演奏も披露され、アフリカから伝わった迫力ある太鼓の音に、枕崎の参加者たちから大きな拍手が起こりました。

枕崎の子どもたちにジャンベを指導する一幕もあり、和やかな雰囲気で約３時間の交流が行われました。

午後になると空が見事に晴れ渡り、青空の下、片泊港で出港セレモニーが行われ、大勢の黒島の方たちに見送られながら黒島を後にしました。

黒島の郷土芸能「面踊り」

片泊小中学校・大里小中学校が合同でジャンベの演奏を披露

「友だちとの再会、楽しかった」

中島彩世里さん（中原）
指宿商業高校１年

中島さんは、中学２～３年生のとき、黒島の大里小中学校に留学していました。

「黒島へは少年の船がきっかけで、また来てみたいと思い留学しました。黒島流れについては、黒島に来てから本などで詳しく調べました。

みんな友だちというより家族みたいな感じ。久しぶりに会えて、またジャンベを一緒に演奏できてとても楽しかったです」